山岳信仰 ―伊吹と霊仙―

坂田郡には、伊吹山そして霊仙山という、山岳信仰の霊場とされるふたつの名山があります。どちらにも、修験道の開祖・役行者の伝承があり、古代以来の山岳信仰と山林修行の伝統、山に対する信仰の広がりは、この地域の歴史を理解するための重要な視点です。

◆伊吹山の山岳寺院

伊吹山（標高一三七七ｍ）は古くから、神の宿る神聖な山として信仰を集めてきました。伊吹山の神は、日本武尊の神話でも、英雄タケルを退けた「荒ぶる神」として登場します。

平安時代の初めには、比叡・比良・神峯・愛宕・金峯・葛木などの諸山とともに、薬師悔過（やくしけか）の修業場として、「七高山」のひとつに数えられました。この、山に対する原始的な信仰と、九世紀頃に伝わった密教とが結びつき、厳しい修行の場として、たくさんの寺院が山中に建立されるようになります。

このような山岳寺院は、北近江の管山寺（余呉町）、己高山（木之本町）、大吉寺（浅井町）や、比叡山延暦寺などがありますが、伊吹山の弥高寺が最も典型的な姿を留めています。

九世紀頃、伊吹山の中腹には、伊吹山寺と呼ばれる定額寺院（じょうがくじいん）が存在したことが、記録に見えます。定額寺とは、官寺に準ずる寺院のことで、三修という法相・真言兼学の学僧が、伽藍の破損と法灯の断絶を憂いて、指定を請い、元慶二年（八七八）に勅許されました。

「伊吹山寺」とは、弥高護国寺（伊吹町弥高）・太平護国寺（同旧太平寺）・長尾護国寺（同大久保）・観音護国寺（山東町朝日）という、俗に伊吹四ヶ寺と呼ばれる寺々の前身的な寺院です。

伊吹山の山岳信仰は、この四ヶ寺と、伊夫岐神社（伊吹町伊吹）・三之宮神社（同上野）を中心に展開します。

中世になると、山伏集団が組織化されていく反面、修行者の「一の宿」をめぐる四ヶ寺の勢力争いや、本末寺関係の論争が起こります。やがて、戦国期に入ると、弥高寺などが京極氏によって城塞化され、兵火による焼失もあって、次第に山を降りていきます。

◆霊仙山の山岳信仰

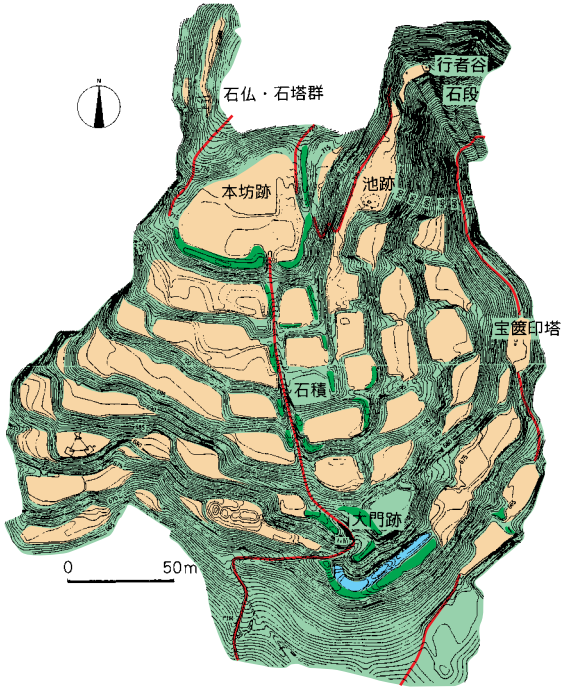
伊吹山を定額寺に導いた三修の弟子に、名超童子（めょうちょうどうじ）・松尾童子（まつおどうじ）・敏満童子（びんまんどうじ）があり、松尾童子は、米原町上丹生の松尾寺を建立したと伝えられています。松尾寺山を含む霊仙山には霊仙寺があり、天智朝の頃に役行者が入山し、養老元年（七一七）、越の泰澄が本尊を安置したと伝えられています。神護景雲三年（七六九）には、法相宗の宣教が山麓に、観音寺・安養寺・大杉寺・仏性寺・荘厳寺・男鬼寺・松尾寺の七別院を建立して、山岳信仰の拠点となります。

山岳寺院の典型を見る 弥高寺跡【国史跡】 伊吹町弥高

伊吹山から南に張り出す尾根の中ほど、標高約七〇〇ｍ付近に築かれた山岳寺院が、「弥高百坊」と地元では伝えられている弥高寺跡です。

弥高寺は、山岳修験の祖といわれる役行者や加賀白山の泰澄が入山し、仁寿年間（八五一～四）、三修によって建てられて、のちに国家公認の定額寺となった伊吹山寺を前身とします。いわゆる伊吹山四ヶ寺と称される寺院の中心的な寺院と考えられます。

永正九年（一五一二）、兵火により焼失しましたが、天文九年（一五四〇）の文書には弥高寺の坊名が残り、天正八年（一五八〇）に山の西麓へ移ったといわれます。



弥高寺跡測量図

◆その構造と城郭遺構

六〇を超える坊跡群は、東西約二五〇ｍ、南北約三〇〇ｍの範囲に集中し、「本坊」跡を頂点として、中央の道をはさんで、下方へ扇形に広がります。本坊跡は、最大で東西約六八ｍ、南北約五九ｍを測り、中央山手に基壇状の高まりがあり、最大で一辺一八ｍ四方の南面する建物を想定することができます。弥高寺跡は、山岳密教から展開した中世山岳寺院の中でも、典型例で、高山中腹にあり、大規模でまとまりのある姿を見ることができます。

一方では、京極氏あるいは浅井氏によって城郭的施設が付け加えられた、軍事的色彩の濃い山岳寺院であることもわかってきました。「大門跡」は、前面に空堀を巡らせ、巨大な土塁で枡形空間を構築しています。本坊跡背後の竪堀群や、山頂からの尾根を断ち切る巨大な堀切はみごとです。さらに南西側斜面にも竪堀や堀切が巧みに配置されていることが確認されました。

弥高寺跡遠望

本坊跡

大門跡

■入定窟（にゅうじょうくつ）

本坊跡の東の「行者谷」の山腹には、入定窟と呼ばれる石窟が設けられています。切石を組んで、人がかがんでようやく入れる大きさで、なかには役行者の陶製の像がまつられています。

■宝篋印塔

弥高寺跡の東端にあたる小さな坊跡に、宝篋印塔と五輪塔、一石五輪塔があります。一説には、京極高清とその家臣上坂泰貞の碑と伝えられますが、定かではありません。

■悉地院（しちいん）（伊吹町上野）

弥高寺の中心的寺院で、一山の学頭であったと言われています。現在は真言宗豊山派で、江戸時代に弥高山の南西麓に移転しました。本堂・庫裏・鐘楼・山門のほか、四季折々の風情を見せる庭園など、弥高寺の法灯を守る古刹です。

■弥高寺の発掘

本坊跡の北西背面には墓地が広がっています。石仏や五輪塔が四群に分かれて、約七〇基以上残されていました。この付近の発掘調査では、一三世紀後半から一五世紀末・一六世紀初頭にかけての瀬戸美濃陶器あるいは常滑焼の蔵骨器、土師皿や青磁碗などが出土しました。特に一四世紀後半の常滑焼大甕には、再葬されたと考えられる人骨、炭、灰が詰まっていました。

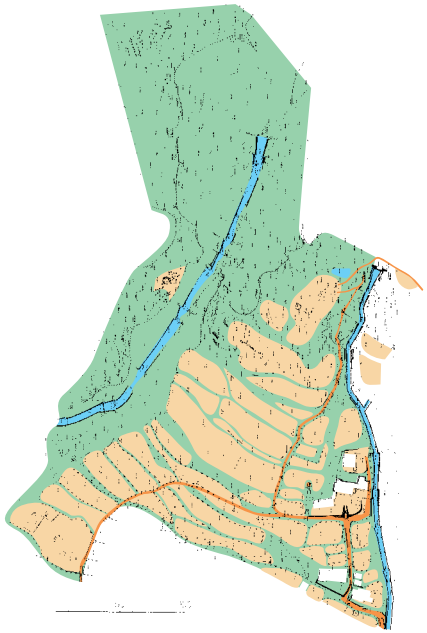
姉川渓谷の山岳寺院
長尾寺跡【町史跡】
伊吹町大久保

伊吹四ヶ寺のひとつで、伊吹山頂から北西に派生した尾根の先端にあり、姉川の段丘上に位置する大久保集落の背後に坊跡群が展開しています。

創建当初は法相宗で、寺伝によると、白雉二年（六五一）に慈照尊者が開山したといいます。その後、伊吹山寺を構成する中心寺院となります。

文和年間（一三五二頃）、長尾寺を再興した深宥は、姉川渓谷を阻む巨岩を砕いて水流を良くし、耕地を広げて住民の利益を図ったといわれています。永正年間（一五〇四～二一）、兵火で堂宇が焼失しますが、再建され四九坊を数えました。その後、次第に衰退したようで、現在では惣持寺が唯一法灯を守っています。

長尾寺の遺構は、南面する本堂（旧毘沙門堂）を中心に、六〇ヵ所を超える坊跡群が、扇型に展開するもので、弥高寺と共通する平面プランが見られます。中心部の標高は約二四〇～三二五ｍで、かつては、背後のさらに高い位置に寺坊が広がっていたと伝えられています。墓地からは、中世に属す瀬戸・常滑・渥美などの蔵骨器が出土しています。


長尾寺跡測量図

■本堂跡

遺跡の頂点に位置する、旧毘沙門堂と権現堂がある削平地は、地元で「ホンドウ」と呼ばれています。南北約二七ｍ×東西約四九ｍを計り、北と西側は、土塁状の尾根で囲まれています。山手には、「隠れ池」があり、かつては水をたたえていました。

新毘沙門堂

■歴代住職の墓地

本堂跡の一段下の坊跡にあります。江戸期のものを中心に、中興の祖「深宥（じんゆう）上人」の墓石も並びます。「南墓地」「ウシロ谷墓地」でも多くの石造物を見ることができます。この他、「車堂跡」や「鐘楼跡」などの地名がたくさん伝承されています。